

うたそら

第 8 号

2022
May 5

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄「新」	18
一首評「そらよみ」	22
短歌リレーコラム「望遠鏡」	24
リレーエッセイ「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27



- | | | | | | | | |
|-------|------------------|---------|------------------|---------|-------------------|--------------|------------------|
| 青藤木葉 | @konoha_ao | 江口美由紀 | @myuki_eguchi | 白石夜花 | @ohana_no_sekai | 御糸ちち | @MEATsachi |
| あき子 | @ponko_san | 大坪命樹 | @OotsuboMeju | 鈴木ベルキ | @pandakirinKaba | 衣未 | @mimi_4567 |
| 麻倉ゆえ | @AsakuraYue | 岡田濫 | @kakomiyano | たえなかず | @suzusuzu2009 | 虫武一俊 | @mushitake |
| 阿部連南 | @renat815 | 音平まゆ | @nandemonaih16 | 多香子 | | 六浦筆の助 | @Tohakunutun5057 |
| 天野うずめ | @uzume_no_hijiri | かづすま | @amicus08 | 高橋良 | @takahashi_ry5 | 六殿めれう | @meruumumai |
| 雨虎俊寛 | @amefurashi3107 | 河井井戸 | @inai_karasuma | 田中翠香 | @sukakinenbi | 村田一広 | @mucc12022 |
| 有村桔梗 | @chattenoire_k | 河岸景都 | @kareido1111 | 千原こはぎ | @kohagi_tw | 杜野詩季 | @4kitanka55 |
| 歩歩 | @subjperf | 菊池洋勝 | @kate_kawagishi | 月硝子 | @gesshodo | 矢野目知桂 | @urisque33 |
| 五十子尚夏 | | 君村類 | @kmmr_r09 | ともえ夕夏 | @croissant_hey_z | ユージ | @b7282e_akaneiro |
| 池田竜男 | | 久助 | @nTbBm64shItap | 中村成志 | @nakam8 | ゆりこ | @b7282e_akaneiro |
| 石川順一 | @Hitler57 | 響音 | | 西淳子 | @jacky24Ray | うま | @lama_miyashita |
| 宇祖田都子 | @Shimsyutu2020 | くろだたけし | @kuro2016 | ネコノカナエ | @nekonokanae_uta | 龍翔 | @oppizuntsuan |
| 泳二 | @Ejshimada | 古都 梨衣子 | @_yu_ca_li_ | 薄荷。 | @aie0himeco | れいあむ | @Re_14m |
| hs | @hswelt | ここのはもも。 | @Puusen0623 | 葉村直 | @nao_hamura | Redvelvetake | @R_velvet_Cake |
| | | 咲兵衛 | @zumnitakeishi | 早月くう | @k_hayatsuki | waka_no | @Cathy01207758 |
| | | 佐藤水魚 | @satohio_tanka | 雛河麦 | @may_spica_358 | 和田晴美 | @hnm143ponta |
| | | 三月三日 | @sangatsu_mikka | つん寿司マイン | @Hk5bNR4wv1wJ8M | | |
| | | 汐射ハルカ | @haru_c17h17cl2n | 廣珍堂 | @Hirochin_dos | | |
| | | 塩谷風月 | @stfugetsu | 飛和 | @hiwa_towa | | |
| | | 紫苑 | @purple_aster | 福山桃歌 | @peachsong_521 | | |
| | | 嶋田さくじ | @sakarako0304 | 細川エリカ | @uluvkassen | | |
| | | 西鎮 | @xi_zhen_lvUT | ほのかわり | @Honofuwari | | |
| | | 雀来豆 | @jacksbeans2 | 真岡まな | @mao_or_mana | | |
| | | | | まゆけ | @mskppompomfuwa23 | | |

計79名

たくさんのお参加
ありがとうございます！

連作欄

8首の連作

自由詠

#うたそら



虚城

青藤木葉

目の端に嫌な炎が揺らぐたび身体は胸からしぼんでしまう
 助手席の窓の先には嘘の城 知らない人の横顔が匂う
 性別の前に一人の間で、こんなこと言いに来たんじゃない
 どこまでも長女であって自らを誰かのために慰めている
 産むための身体に生まれて受け入れるたびに痛んで、辿りつけない
 ため息は湿度に変わる夜はまた擦り切れてから夜を迎える
 どうせなら五本の指を突っ込んで奥から崩して欲しかった
 周りにはぬかるみだらけこれからも晴れない街に佇む虚城

トンネル滑り台

阿部連南

持ってきたシートは四角に繋がらず風車みたいな形になった
 連結のお菓子を渡すでも君はたぶん繋がったほうを開けちゃう
 取り出した道具と芝生へ走って文化部だけど自信はあって
 ガタガタの星の模様を描くように五人で投げていくフリスビー
 砂時計よりもゆっくり舞うシャトル追って笑えば今日も友達
 幼さで今の自分ができている回って上る遊具の階段
 遠くても声はこうして運ばれるトンネル滑り台を電話に
 少しだけ同じクラスのようだった 新学年へシートを畳む

サンデー

天野うずめ

お互いにダメな日だねって言い合ってお互いに肩揉み合っている
 低気圧接近により生活が停滞している ルンバ以外は
 適当に着るパーカーを選んでる春にも夏にもなりそうな日に
 とりこんだ洗濯物をためずに山という名の塊となる
 明るい嬉しくなるねコンビニに行くため渡る横断歩道
 よくわかる社会の仕組み ツイッターで見たことがあるアイスを買って
 プロ野球中継終わった静寂が包み込んでる眩しい西日
 くだらない話を一つし終わって明日の仕事を殲滅したい

流星雨

雨虎俊寛

東へと速度を上げるちぎれ雲 季節外れの気圧配置に
この部屋の確かなものはきみだけで無視界飛行のなかで抱きあう
雨雲に太陽さがす向日葵とおなじうなじをきみはしていて
すこしだけ開く窓からしぶき雨かまわずきみはくびすじそらす
いく筋も窓うちつける流星雨 破裂しそうな鼓動かき消す
流星とおなじだきみが言いかけて逃がしたままの言葉のつづき
約束をいつからだろうねだらないきみが見つめるドシャ降りの雨
僕でなくてもよかった夜のロール紙の上に置かれたドライフラワー

あづさゆみ

有村桔梗

いつしらに取り残されて春の夜ちひさくなつたラミーをかじる
あづさゆみ『春原さんのうた』を観るちひさき映画館のかたすみ
つぎつぎに花は咲きだし類想の春にさまよふわたくしである
ひとりぶんのさみしさが夜に濡れながら佇んでゐる春の公園
黒猫に起こされてゐる春未明 夢に見てゐたひとを忘れて
美濃焼にひと枝挿したゆきやなぎ夢のみぎはをあふるるやうに
たましひが飛び立つたつてわかるから白木蓮のはなは、笑つて
あふむけのひとばかりゐてはなびらは春の涙のやうにはららぐ

花冷え狂詩曲^{ラフソッディ}

五十子尚夏

花冷えという語彙などを沈むれば爛れゆく臓器わが裡にあり
沈丁花のはつかに香る裏路地に手裏剣を投げつけられている
花降れば花のあわいに惑いたる心地して一度のみ竹刀振る
両の手にますかけ線のあることの愛しき今宵の枝垂桜よ
花曇りの洗面台に名も知らぬ化粧道具のしずもりてある
アネモネとその名を声にするときの少女にしては大人びている
世界から取り残されてゆきそうなSURVIVE花や詩をすり抜けて
花疲れこの世を統べる神のごと地球儀に手のひらを翳しつ

夢八夜

池田竜男

弓であることを忘れて耳であるたくさんの弓電車に揺れて
この車両だれも携帯見てなくてひとに見られて赤らむ車両
船上のカフカの咳がおさまって静かに揺れるカフカとボート
口ついた「フアイト」は部屋に留まって夜帰宅して「フアイト」歌う子
ゴダールの恋人は夜ゴダールの寝顔見ている メガネ外れた
閉じたならもう開かない朝顔は開かないよう傘は雨堰く
足あとはいつも無名できみの靴きみいなくてもきみを呼ぶのに
肛門にトイレットペーパーはさまって 兄さんさよなら さよなら弟

日常生活

石川順一

「北風のうしろの国」の完全版うちに有るのはダイジェストである
鴨は居なくなりけり草餅の白粉を気にせず食べて居る我
キリンラガービールの缶を捨てられずベビーチーズに鉄分が有る
三枚の板を運べば店内でビール飲み出す男を見たり
チューハイの缶が斜めを向いて居る段ボール箱は正常なのに
ポップコーン弾けて居ない玉多くカフェオレコーヒー復活したり
図書館の高さが足りぬ浩瀚な書物を読んで行かねば眠る
清隆と武揚の友情惚れますな内閣制度は様変わりして

ふたつのものについて

泳二

たくさんの道を覚えたこの春にあなたを何て呼べばいいのか
ハンドルを握るわたしを助手席の化粧ポーチがじっと見ている
ひとりでは使いきれない物ばかり売っている店きれいな青の
信号を待つて過ぎた冬だった小さな言葉ばかり気にして
わたくしとわたくしでない人のため白と茶色の卵を割りぬ
触れるとは荷担すること荷担した物語を今朝も捨てに行く
どうしても覚えられない人の名を覚えてくれるペットが欲しい
「ねえ」と呼ぶ前のかすかな決心の呼吸と共に「ねえ」と呼ばれる

屋上猿部 VIII

宇祖田都子

簡単にいいよって言うジャムパンが売り切れていた理由も聞かず
先輩の顎がコトリと載っている膝のお皿でスープを啜る
屋上に呪文のごとく響く名よ五月の夕の同報無線
屋上にヒビは鋭く深くあり階下に闇の雫を落とす
屋上に打ち捨てられたオルガンのふいごの音にそっくりだった
屋上を出るときみんなごめんねとつぶやいている五月の夕べ
青葉風タウンページをバラバラと鳩に読ませるポッポオーッポポ
もう何も受信していないアンテナが私を含め三本もある

息ができない

江口美由紀

その怒りはとうめいでわたしそのものになり朝焼けの街へ出てゆく
平凡な労働をして平凡なお金をもらったりしているうちに
鑑賞用の梅、果実用の梅があり残らず味わいつくして帰る
雪柳には雪柳の凝りがあり夕闇のなか伸びをしている
春の雲の求愛のそのあとさきを駅ホームのベンチにひとり
街灯はくじらのかたち日暮れには腹がまあるく灯るのだろう
桜とりわけ今まさに咲きだしそうな桜の下は息ができない
ずっと二人で留守番をしているような令和二年令和三年そして

ウクライナ侵攻に泣く

大坪命樹

刀よりしたたかなれる文筆の未だ知らざれどなほ書かんとぞ
 いかなる世ぞ大量無差別殺人鬼を大統領と呼ぶは 仏よ救世を
 プーチンよ救はれんとぞ僅かにも思はば南無阿弥陀仏唱へよ
 プーチンとて生身の人なり 世界拳げ戦争放棄の楚歌ぞうたはん
 ウクライナが爆炎と血に痛むべし かの傷痕にわが死を重ねよ
 とほき国虐げらるる人のをり 彼らが春をなんぞ奪へる
 虚言吐き残虐兵器ぞ使ひぬる 救ふ神やはたれかおはする
 歴史書にプーチンファシズム記さるべし 核終焉アルマゲドンの来たらざらば

ガラクタ

がね

起き出せばすでに呼吸を始めてる 息が僕から逃げ出している
 シャボン玉うかんでおちるそのうちにこわれてしまう透明なビル
 パートにバラボラアンテナあったんだみんなさびしがって良かった
 キシキシと鳴る自転車はわらってるなんてことなく苦しんでいる
 銘柄で言われてすぐに番号が分かってからがコンビニ店員
 点滴のリズムで雨が打っている ビルが光ってれば人がいる
 次男だから二なんだねって 違うけど そうだよって 違うけど言う
 ガラクタの前はテレビだったガラクタを手際よく回収してしまう

ふたしかな

かうすまゝ

書き出しのうつくしさのまま眠りなさい Hi, my name is 春嵐
 黙食はしぜんにマナー監視へとつながっていく さいあくだこれ
 茂みを抜けたら全てが見透かされている 手を握らせることは危険だ。
 忘れられないぐらい消したい記憶です Hello, キャンパス Hello, 隔絶
 愛されてしまえばいいと思ったり眺に目をしばたいたり
 そうやって君は豊かになるんだね 僕はいつでも死ねるコンパス
 ありがとう 僕のすべてを知っているようになんにも知らないひとひ
 ふたしかなデストロイ、ラブ 泳いでも泳がされても季節のままだ

鳳の友

瀬川井戸

六連の蛍光灯の遅しき烏龍茶にもビタミンがある
 山積みの未読冊子をメルカリに売ると云う友はつらつと言う
 バルザック全集指して『五十代になったら読む』と言ってなかった？
 移り気の激しい友は自嘲して笑う方針変わったのだと
 景品でもらったらしい毛布借り仏間に泊まる寝心地が良い
 鳳の未明いびきで目が覚めて昨夜残したルーペラを食む
 学生のころとは違将来の話をなにもせず別れる
 擦りガラス昔ながらの理容院横目に歩き鳳駅へ

アンティーク

河岸景都

来客を拒んだ門をこじ開けて秘密を暴く、晴れているから
 私だけ写真を撮った場所があるみんなが逆を向いていた場所
 壁紙の様子が少し恐ろしいこんなに美味しい珈琲なのに
 アンティークチェアに座り深呼吸、沈み過ぎたらもう戻れない
 遠い国遠い時間の思い出を隠したままに売られるチェスト
 錆びついた足踏みミシン手放したその日を誰も覚えていない
 空気にも感触があるさらさらと捉えきれないこの店が好き
 何故だろう初めて立った場所なのにただいまと言いついそうになるのは

存在のすべて

君村類

「ねえAlexa、音楽をかけて。祝福をして。存在のすべてを賭けて」
 ゆがんでもカーテンレールが導いたカーテンのとおり夜は明けていた
 終わり続けていたかった白昼のひなたへ出しておく金魚鉢
 撫でている床にざらつき いつかこの手はまた別の人間を抱く
 ねえAlexa、ひとを過去形でいうときは ねえAlexa、聞かなかったこととして
 そのKing Gnuの曲で泣いていたあなたを思い出して泣くだろう
 自分だけの秘密としての運び出す荷物の中にいないAlexa
 エンドロール それから先の出来事を誰も知らずに暮らしが続く

それらすべてを抱いて眠ろう

菊池洋勝

希死念慮切れ味試す新甘藍それらすべてを抱いて眠ろう
 新人女優の気取らぬ抱き枕それらすべてを抱いて眠ろう
 新撰組を偲ぶ段だら羽織それらすべてを抱いて眠ろう
 新宝島の頁の興奮をそれらすべてを抱いて眠ろう
 新玉葱を刻む涙が干えるそれらすべてを抱いて眠ろう
 限定や新発売と付くものはそれらすべてを抱いて眠ろう
 昭和生れの手に新マンのソフビそれらすべてを抱いて眠ろう
 紙と洋墨の匂ひ嗅ぐ新連載それらすべてを抱いて眠ろう

Le Temps Perdu

久助

靴音を吸い込む青いじゅうたんの搭乗口はもう空のなか
 バゲットを竹刀のように手に提げて信号を待つ巴里のおじさん
 ポッキーが「ミカド」となりて接見す巴里のぎやるり・らふあいえっと
 シテ島の端の柳の木の下は恋人たちのVIP席なり
 マドレーヌ、ピラミド、シャテレで降りてシテ島の方角分らず町をさまよう
 朝まだきキックボードが走り去りあとは静かなバスキエ通り
 路地裏の菓子屋の時計永遠に三時をさせりムフタール街
 まだ巴里の夢を見ている サン＝ラザール駅で時計の留め具は外れ

王様

くろだたけし

結界の中で狂っていく人を見ている僕は正気だろうか
 王様になれるものならなりたいと思えるほうが出世はできた
 年を経るごとに悪人顔になるテレビに映る偉い人たち
 連日の会議会議で宮殿の時空はついに歪みはじめる
 頑丈で分厚い壁の内側で変異していく愛もあいつも
 現実とはゲームのように変えられて王様を持つコントローラー
 いきり立つちんこ自慢とちんこ好き滅び切るまで飛び交うちんこ
 選ばれて鎖帷子を着た僕によく似合うよとみんな優しい

鬼灯の星

咲兵衛

ひと鉢を道しるべとして手に提げて鬼灯市より帰り続ける
 鬼灯の宇宙の樹形を見下ろせば瞬く星の花はさきがけ
 生まれくる視点そのもの鬼灯のてつぺんの星に流れ着くとき
 みづからを星に宿らせ身籠りて青き萼の帆綴ちてふくらむ
 しんがりを照らし続ける気概の朱 地より連なり色づいていく
 あの星は消失点でもあるのだらう地平の向かう際で輝く
 雑踏に消えゆく背中に仄あかく灯るひかりを見送つてゐる
 風待ちの下宿の窓辺に風鈴は澄んだ音色でカラランと鳴る

均衡

佐藤氷魚

ふれ合えばどうなるだろう茹でたての卵のふちはうす緑いろ
 金曜の髪を解いていくようにパスタのソースを剥がすあなたは
 工場が白い煙を吐いている夜に息つき忘れるつがい
 しあわせはシンメトリーにやってくることはないけど幸せと書く
 暗闇に浸した瞳が鋭角の陽射しに染まる胸を映した
 フォークからこぼれてしまうパイକୁずを掬うやさしい手があつてなお
 何歳になつても慣れないわたくしのナイフがきみをだめにしてく
 長い長い砂地を歩く後悔とデッキシューズを友達として

汀線と上空の風

汐射ハルカ

けらけらと蛤わらう春なぎさ白い砂粒そらとの境
 ゆうやけは背中を見せて星もなく黒い夜空がビルを壊すよ
 石狩の幾つか丘を越え到る白い汀の望み来る浜
 心臓のかたちを模したケーキから思い伝わるきみの思いが
 木苺はぼくらの想いの集合体あかい果実のひと粒ごとに
 ふたりして壁にもたれるひとときは夢じゃないよね淡い痛みも
 先刻の夕焼け空は漆黒の月も翳りしきみのすがたは
 血潮打つぼくらの胸にしづき舞う虹も架かるね涯がない旅

ハルシオン

塩谷風月

祝福を春に贈ろうヴィーナスの吐息のように芽吹いたあなた
 頑張らないことは淋しい雑踏の横断歩道で肩を押されて
 閉じた目に染みる日差しの温かさあの日あなたに言われた言葉
 ハルシオン春の紫苑と書いたならきれいな夢が訪れますか
 花の名を思い出せない指先で君のくちびる確かめながら
 excelでF2を押せば刻まれる傷口にただ「済」と打ちたり
 冷えきつた空では星は瞬かぬ「あんなに硬いひかりはきらい」
 道を訊かれ指差せば遠く雲がゆくあの下の海を右に曲がって

責了

西鏡

ひとりでも生きていけないはずはないバターは蒸いんげんへ溶けだす
 どうせならつけばよかった嘘みたく自分の舌をしばし味わう
 風に舞う必然の死にまみれつつつくり春を脱ぐアスファルト
 またきみも暗渠にされた川だろろう渋谷道玄坂をくだれば
 ラヴ・レター 遠くの星が滅びゆく光のような筆跡だった
 責了、にチェックのついた原稿の余白の白に近い木蓮
 なにも食はず始発に乗ればこの街が汽水域めく旅のはじまり
 船乗りの矜持のようにどの猫も伸びるときは海へと向かう

猫を看取る春

嶋田さくらこ

また春だ花咲く春だもういない人をおもうのにちょうどいい
 季節がまた巡ってくるあの感じ、どうしようもなく花に焦がれて
 春なのにもうすぐ猫は死ぬんだろろう十九年は長いんだろろう
 人生は悲しいことが多すぎて大人もやっぱりちゃんときかない
 「猫 火葬」で検索をする出張の火葬車があることに驚いて
 橋は虹色だっただろろうかふつくらとまだ柔らかい腹を撫でつつ
 ここにいて、どこにもいかないで、ねこよ、花降る春の光のなかに
 葉桜の並木を抜けた先のもう行かなくていい動物病院

雨がふる

雀來豆

もっとあかるい文体にするべきだった物語が終わらないのよ
 雨がふる猫の絵を描くのがうまいひろせあさこは砂場に来ない
 春は朝。詩をそらんじて閉じ込める動画の中のふしあわせ犬大
 メルカリで買ったプラレールの箱の掠れたやまねころの名前
 相聞歌ころもとなくたちまちに形容詞から古ぼけてゆく
 ちょっと見せろよ誰かが言つてポケットの歌集は消える空はゆうやけ
 たとえば仮にと言つたあなたにラリー、モー、カーリーたちが手を振っている
 夏、平行四辺形に酔うバスケットゴールの黒い影がゆらめき

瓶底

鈴木ヘルキ

地続きの朝を迎えてコリコリと朝飯前にコーヒーを挽く
 透明になりたい風で飛ぶほどの 予報は晴れの君の住む街
 何もかもうまくいかない日もあって玄米なんか食ってられない
 隠してた本音を言い出せないままに借りたノートに落書きをする
 本当に会えるだろうか 瓶底は光を溜めてほのかに滾る
 底のない空をトンビが飛んでいる私のいない街と知らずに
 それでいい楽譜が風に散っていく何小節かは飛んでついでいい
 流星はいつでも飛んでくるのだろう 祈りはきつとあなたに届く

矛盾期

たえなかず

緞帳が上がるライトがあてられるわたくし役の女優が躍る
 痛みある心の端を捕らえられ乳腺外科をしずしずとゆく
 返信をくれない人の携帯がつねに充電されていて春
 太田光はひかりと読むと知らされて晩春おそはるの闇にかすかなオーラ
 覗いてはいけない、あなたがみつめるPhoneに広がる海の差出人を
 忘却の彼方の冷雨 わがゆめにゆくダイヤモンドプリンセス号
 水曜のペンを走らせわたくしは私のことしか考えません
 白シートの白い封筒白木蓮一瞬わたる陽にみえ無口

春はあけぼの

田中翠香

篠の目に朝日差し込み大臣の屋敷の朝がまた始まって
 宮仕える間にも暇がありぬばたまの墨をふくんで筆はふくらむ
 清原の、少納言様の……娘さま 今日も名前前で誰も呼ばない
 中宮が天皇がいて大臣が私も同じ時代を生きる
 書いてやる私はいまを生きている中宮定子様と一緒に
 なにひとつ思い浮かばず夜は開けて山の端から光がここへ
 決まった「春はあけぼの」これでいい私の想いを綴っていいこう
 また今日も始まってゆく宮仕え世界はなべて輝いている

遅い春

千原こはぎ

お隣にもらった三つ葉をたつぷりと茹でてナムルをつくる 正しい
 寝てる猫また寝てる猫また寝てる猫 春眠かやつぱり老いか
 世界から取り残されたこの部屋の小窓にとどく春を吸いこむ
 洗濯物外に干したくなる午後のこれが春ってことなんだろう
 夢にきみがでてこなくても春だから世界はたぶんちゃんとやさしい
 聞きたくない見たくないことばかりあるまは朝ごはんを食べないと
 わたしだけ止まったままだ三度目の春はわらって夏へと駆ける
 次に会う日は夏か秋、冬か春 見えない未来ならもう見ない

初夏の苳物語

多香子

くちなしの白き香りに追憶の扉の向こうに立つ人のあり
 海辺行く、菜の花畑に照らされて私のカバンが黄色にそまる
 気丈夫な友のさいごの「さよなら」をまだ覚えてる 卯の花が咲く
 あなたとのすれ違いさえできなくて夕焼けの橋は燃えているよう
 灼熱のあなたの胸に飛び込むはポーチドエッグのような危うさ
 牛ならば二つの胃の中スイーツをつめこみ反芻する花月夜
 初夏の朝きみに渡そう誓わずにミント色した忘れな草を
 両の手を合わせて祈るマグノリア静かに開きはじめるこの朝

春の暁

高橋良

吹雪くなか高速道の上をゆく白鷺あれば緩むアクセル
 夕時のホワイトアウト消防車の鳴らすサイレンの後に連なる
 奥羽山脈横切るトンネル内をゆき雪のため起る渋滞に入る
 トンネルに響くサイレン出口なる事故の現場へ向かふ救急車
 病となり頻りにトイレへと向かふ外の世界の光浴びつつ
 生まれつき左腹部に痣があり前世は切腹したかと思ふ
 反事実的なる思考巡らせば中国留学するわれがをり
 起きてすぐ抱かること求め来る幼子があり春の暁

十五時の西日

月硝子

飛ばし読みされる保健の教科書にヒトの受精はひっそり進む
 原色にまみれた菓子で舌を染めすすく育っていた昭和の子
 十五時の西日を溜めた駄菓子屋の瓶のスルメがそっと身じろぐ
 人絶えたシャッター街に有線は今日も数え唄をかけ流す
 幾たびも夢に訪なう街角にまだ揺れている氷屋の旗
 昼の月みたいな歌の感傷を背に校門を送り出される
 卒業後ひとり覚えている顔は学級文庫の心靈写真
 言い訳や酢豚のパイナップルや先に逝く家族を許し大人一枚

くろわさん、高校生になる

ともえ夕夏

春は来ぬきみを抱へし麗らかな日の掲示板しろくかかやく
 あれこんな翼が生えてみたのかね膨らむクロワッサンのかるやか
 制服に真青のリボン点したる子らの背筋のびんと伸びをり
 自転車に跨がれば風こんなにも「いつてきます」が晴れやかである
 ちさき背のおほき鞆に空つぼの弁当箱がかちやちやと鳴く
 「演劇部にしようと思う」嗚呼きみも母の沈みし沼を見つけて
 新しき友達すぐに作りたり素顔のわからぬブリクラ二枚
 好きなひとのひとりも連れて来なさいな母はその日を待つてをります

姫へと杯を

中村成志

子曰く脚は腿より振り上げよ早ばや春となる畦道を
 来るときは来る春があり人がいて白木蓮は開きが過ぎて
 南関東午後より日射しコノハナノサクヤヒメへと杯差し上ぐる
 ひこばえの桜ばかりを見て歩くかつてここには堤があつた
 ひらけゴマ開け月輪天上にハナミズキいま大きな背伸び
 純白は緑に沁みるものなれば視界を覆う大島桜
 いま靴は重いでしようね紅白のつつじそれぞれ雨を溜めゆく
 今日からは暑さと呼ぼう朝の陽のソメイヨシノの深緑眩し

これは誰かの28歳

西淳子

CDの光で好きな音楽をカラスたちにも教えたくなる
 ストローをつけますかって聞いてくれ俺がレトルトカレー買うとき
 再結成されたバンドのドラムだけ集めて、笹井宏之ごっこ
 かき氷の溶けたぬるいを飲み込んで、夏の終わりはこういう味だ
 ピーマンの皮肉詰めとか大目玉焼きとかを食う泣きながら食う
 神様に祈りをささげるように待つ三分間で す ラーメン
 マフラーは冬の散歩紐。うれしくって犬みたいに白い息を吐く
 ジュンク堂でキスをしている人がいて初谷むいファンだとおもう

海へいこうか

ネコノカナエ

川沿いをずんずんゆけばもしかして海なんじゃない 行こうか週末
 まだ海に触られていないつまずき先が海を指すんだペダルを漕いで
 川沿いをずんずんゆけばゆきどまりそれでもあつちが海だとわかる
 山なみのほどけて空が流れ込むあつちが海だあつちが海だ
 海までは入り組んだ道関係者以外立入禁止の何か
 鼻先を海がさらってすこしだけ海にほどかれちゃってもいいかい
 浜辺には少し遠くてつまずき先はまだしばらくは波に会えない
 浜辺には少し遠くて海の香を嗅ぎにゆうぐれ港へむかう

夜は青色

薄荷。

この街のブルーな夜に馴染むように暗青色のスカートをはく
 時々車が通って時々散歩の犬が行く住宅街
 青色に時間は流れてそれぞれの窓辺に降りるそれぞれの夜
 あなたじゃない誰かが誰かを呼ぶ声が響いてひとりぼっちの公園
 たどたどしい十八歳のブルースのまだ諦めのつかない夜だ
 この夜を漂白している看板灯(道路向こうのドラッグストアの)
 波音のリズムで道路をぬらしている海のない街の点滅信号
 言いかけた言葉を幾つも飲みこんでこの街の夜は何処までも青

ちがうらしい

葉村直

中学の指定ソックスそのままに運び込まれた病室がきれい
 怒られるより叱られることばかり 見舞いの姉の息は乱れて
 昔から病弱だねと苦笑する口のほくろをずっと見ていた
 姉さんと呼べないときがたまにある「ねえ」でとどめて飲み込んだ「さん」
 点滴とポカリは同じ成分でわたしと姉の血はちがうらしい
 六月のプラスチックの大会を母さんはたぶん見に来ないだろう
 ため息とくちびるとひそめた眉とわたしの髪をなでる右手と
 またくるね、の「また」が机に光ってた 高いゼリーと二つのスプーン

パラオと七つの子

ヒブノ寿司マイク

昨日からかわいい七つの子を残し母さん燕が帰ってこない
 父さんのワンオペ育児狩り給餌雛の保温にキリキリ舞いだ
 一羽減り二羽減り車庫の軒下の巣のなか眠る骸むくろが七羽
 七つの子 燕ツバメの国へと旅立って十三時半に吹くぬるい風
 父さんはひとり南に帰るのかパラオで妻子を懐かしむのか
 車庫を出て彼方へ高い声で鳴き 見えなくなった見えなくなった
 夕方に二羽の燕が飛んできてこれはたまげたスピード婚だ
 父さんと新妻せっせと巣を直す命短し恋せよツバメ

永い夕暮れ

早月くら

みずうみに沿って歩けばいつの日か海へと還る、そんな約束
 現在を過去へ調律するように朝、透明な音叉をたたたく
 木漏れ日の円を数えてやわらかなひかりは距離の表れだった
 はつなつの満ちる加速度 また日々はいのちのほうへ傾いてゆく
 窓際で氷の溶ける音だけを聴く、しずけさの色はみずいろ
 白夜とは永い夕暮れねむれないことも正しく許されながら
 掴むほどこぼれ落ちゆく砂粒を銀河のように手放している
 待っていて、たった数十年分のひかりをためて会いに行くから

Sunny Side

廣珍堂

街角に少女の弾けるインヴェンション左手歌ひ左利きかも
 保育園帰りのバスを待つてある母親の手が持つチロルチョコ
 川あれば花は盛りの喧騒をすでに流して誰ぞとめなん
 屋敷の町屋の店を出でたれば背広の袖の重たかりけり
 今日もまた保育園児のお散歩が信号を待つ御苑の角に
 人工の日向と土の街に住み定年の日に見る空の青
 女生徒が校門前で騒ぎつつ今日もスイーツ攻略に行く
 学ランの前をはだけた生徒らは汗の匂ひの狭き電停

はりぼての喜劇をききと

福山桃歌

雷鳴が暗い東の空を駆けめぐる 今日から家族のぼくら
 西日には黄昏の赤 夕暮れは歪んで見える箱庭の夢
 はりぼてを抱きしめ深く眠るときこそを愛しく思ってしまう
 守るため伸ばした腕の白くありいばらの花のうつくしきこと
 禁断の林檎が落ちる にんげんのつみはあまくてやわらかいもの
 どちらから昇るとしても太陽は世界にすぎかなひかりとなつて
 ピスタチオ、アーモンド、ピーナッツ まだ知らない味を探す街角
 生きるため乗り越えるべき任務はわたしを導く八つの星

どこにもない暮らし

ほのかわり

いつもより七分早く目が覚める 七分かけてわたしに戻る
 明け方に見た夢のこと でも夢は思い出さない方が夢だよ
 まだ空を知らない鳩が時計から一時間に一度だけ出てくる
 スカートをかう スカートはどうしても風のかたちを覚えられない
 懸命に領いていてあのひとはきつと発電してるのでしょ
 ばらばらにほどいたしめじ この手からうまれてしまう孤独のはなし
 ポケットに入れっぱなしの悔いがあるいつもより暴れる洗濯機
 雲丹色と言われてからは雲丹にしか見えない布団 ちよつとうれしい

1972くけぶる団地

まさけ

勤め場の微粒子けぶる踊り場でひとり静かに眺む朝焼け
 隣人もまた隣人も隣人もけぶりに包む鉄の工場
 妻たちがけぶらす噂おそらくは口裂け女もここが初出か
 屋下り並ぶ団地の一室で淫靡にけぶる白いカーテン
 味噌汁と喧騒で湧く白壁を淡くけぶらす帰路の夕焼け
 爺さんの龍角散と児をはたくシッカロールがけぶるお茶の間
 母さんがけぶるテレビを2度叩きさらに輝くジュリーの笑顔
 文化的圧迫感がある窓にけぶって映る私っぽい月

動物園日和

御糸さち

一軒家建てる如くに悩み抜きついにひとつのおやつを選ぶ子
 子供には「ひとつだけね」と言いながら親はおやつをみつ購う
 子供にも事情あるらし東武線にアタリの車両ハズレの車両
 動物園日和だねえとどこから聞こえてくれれば子はうなずいて
 ガチョウは日かげヘカピバラは陽だまりへ 光に対し態度それぞれ
 ヘビのケースに【調整中】の貼り紙があつて調整されているヘビ
 アポリジニ一家三人カンガルーひろるばのすみの団欒や良し
 リスを見てフクロウを見て「チタタブ」とつぶやく友の瞳、黄金

西瓜五

虫武一俊

満開の桜に意味を与えてた昨年までのおれの傲慢
 嘘をつく瞬間ひとは目をそらす道端に花を見つけるように
 仲違いするふたりからそれぞれに受け取っている愚痴とコーヒー
 資格のために高校物理をやり直す今日の摩擦も電気にならんか
 受け容れていけるだろうか知っていることのない自分自身を
 電子決済できる自販機まで五分 足りないところは自分が埋める
 氷山が二〇年かけて大海へ崩れゆくのを見つめるツアー
 おれのへその話のときに率直を見せるあなたも持っているへそ

春の力学

六厥めれう

今すぐにこの紙パックを捨てたくて表面張力いっぱい注ぐ
 一日にほんの一瞥くれるなら柱時計の真似だつてする
 笑うから溢れてしまう鎖骨とは水を湛えておけぬみずうみ
 砂嵐うまく説明できなくてアナログテレビの動画を捜す
 戦場も搜索現場の中継も既読のつかぬ世界から見ると
 ただ単に春の嵐でいいじゃないメイストームは和製英語だ
 呼び鈴が鳴るより一瞬だけ早く人が来たよと知らせしてくれる
 ドアノブを右へ回せば左へと回る世界はすぐそこにある

桜・サクラ・さくら

六浦筆の助

花筏となるように散れ「うたの日」のどんまい取りしあまたなる短歌
 桜舞ふ小袖に若草色の帯、和菓子のやうな君に逢ふ夢
 清経の笛の音聞けば夜桜は闇に散りゆく平家の小舟
 夕暮れに八重の桜か燃えており 夜の地震を知るかのように
 写メだけで通りすぎてく花見にはついてゆけない「かつば黄桜」
 人もなき上野の山の日暮れ道 花雪洞は鎮魂のごと
 木村屋の桜漬載るあんパンと銀ブラをした三十の我
 桜湯にまだ縁はなく 接種してやつと葉桜デートが実る

蒼いメール

村田一広

アップルパイ湯気をたててる真つ赤な容器の真つ赤な皮をむいたら
 生々しい蒼空がメールで届く浮き出す白い雲の断片
 ポテトチップスフライドポテト食べながら(アクリルアミド)七文字うかぶ
 僕の螺子ぢやないよね近頃足元にしばしばこぼれ落ちてゐるけど
 駐車場の札を立てれば車来なくなつても駐車場であられる
 (見終はつたらまた海に戻してね)手のなかのアンモナイトの化石
 手首の線と平行にして幾本も肘までリストカットが続く
 洗濯機買ったけれども洗ふもの何もないのよ野良猫家族

陽だまり遠く

杜野詩季

食欲と飲み始めことのせめぎ合い饅頭食べたい食べたいと泣く
濃密な時間をつかむ父の手を握ればベッドの下をゆく風
弟が初めて寺へ妹はお菓子わたしは花係となる
新聞がずっと友だち膝つめて話したかった欧州のことを
仲良しに見えなかったひと組の片方がただ涙にくれる
「女には学問要らぬと言われたよ」「じいちゃん、まじ?」と仰げ反る娘
それぞれが愛されたけど一番の歳上私はその分長く
「朝顔がお好きでした」と強面の庭師が語る陽だまりの父

知らないでしょう

ユーリ

画面には映らぬ癖を知りたいしそれは誰にも教えたくない
一時でも同じ視界を持ちたくて送るゴッホの春の絵葉書
ひとりふたり家路を急ぐ夕方に君が帰る場所がここなら
壁一枚隔てた距離で思い知る有象無象の我と君では
とりあえず同じ空気は吸ったけどその他大勢も同じ空気
君の手に渡せなかつた旋律がかばんの奥で糸と絡まる
顔洗い泣けてくるのは張り切ったメイクが成仏できずにいるから
満開の煌めく桜月夜より焼き付けたかったせめて影でも

春の色

ゆやゆき

四月ってこんなに寒いものだっけ我慢出来ずにストーブを焚く
綻んだ蕾は固く足踏みし桜を長く楽しめそうな
桜より早くに開く紫のヤシオツツジは寒さに震え
天然の芳香剤はヒヤシンス強風に折れ傷付きながらも
見覚えのない水仙が咲いている春の色だと訴えながら
ニュースでは満開の報この辺でぼつりぼつりとピンクを探す
はしゃぐ犬葉っぱをひげに付けながら誰より春を吸い込んでいる
生命の強さを思うムスカリも、梅も桜も一斉に咲く

冬の鎧

ゆりこ

階段を駆け降りてゆく蜘蛛の巣が張られた手すりに気づかないまま
すぐに手を洗えばよかつたけど夏の影がだんだん濃くなって、無理
剥きすぎた唇に滲みる後悔の膿を何度も味わっている
蓋のない排水溝に流すのは秋雨でなく明日の私
長くなる影が優しい診察の予約はいつもの午後2時にする
少しずつ冬の鎧を脱ぐために眠り貯金を続ける風鈴
君らしく生きてほしいな、丸い背と新月の空を見送っている
新しい手帳を選ぶブリキアが再開された春はうれしい

上野にて

うま

ひとり身でさみしいだらう?と胸をもむ隠語ばかりの腐れ縁なり
女の子が好きならきつと切りすぎたおまへの爪は目に入らない
虹色に灯るひかりはあきらめて魚のやうに口を動かす
本当はうつすら気づいてゐるくせに ジョッキの底にはき出す思ひ
池に沿ひひとしく春を待つ鳥よおれは上手に距離を置けない
女の子とは切れさうな右の手の生命線について話した
眠れないときも眠らなきやならないカプセルの外聞こえる寝息
上野とふあかるい夜の向かうから塔は見下ろし喜劇をわらふ

亡き祖父へ捧ぐミルクキャラメル

れいあむ

花埋み冷たく閉じたくちびるに末期の雫のコカ・コーラ
とどかない語尾まちがいの流行り歌窓の外には春がほころぶ
担い手の背さえも丸く頼りなく揺れる棺が空へ旅立つ
箸先でからりとまるぶ骨の音に白百合の茎の緑が滲む
あなたなら笑ってくれと信じてる位牌がわりのチョコレート
豆蔕の枯れゆく松の盆栽に水遣りをする影ひとつなく
主人なき荒れた庭にも芽吹く夏お隣さんの藤の棚
繰り返し願うほどに遠ざかる雲の峰からのち降る降る

第三の目／テセウスの船

龍翔

まばたきをひとつふたつとするやうに白木蓮のひらいてゆけり
第三の目をさがすときひとびとは誰しもいちどへそをとほりぬ
水滴が茎をつたつてゆくやうにあなたの汗がつたふ脇腹
血液のつめたく巡る春の夜の花瓶の水に砂糖を溶かす
はなびらが目に見ゆる日はあまたなる目が水面を流れてゆきぬ
切り花はまだ生きてゐるわたくしも往生際の悪く生きたし
どこまでが頭かわからなくなりて首のうしろに櫛の歯を当つ
細胞の生まれてはまた死んでゆくわたくしといふテセウスの船

広い空

和田晴美

猫おじさんが猫の寝床をととのえて猫待っている葉桜の下
成れの果てと云うのだろうかこの辺り誰もが顔をなくし行き交う
妹に会うたび確かめ合っている母は最後に何か飲み込んだと
子が夢で花吹雪に変化していく生き延びるよと言わせたばかりに
吐きながら食べなくても良いもう良いよ更地から見上げれば広い空
ふっさりと八重桜に胸ふさがれて眠れない闇に居るゆえ春は
いつ如何なる時にも如何なる旗の下にも集う事はしないと誓う
故郷にも否どこにでもコメダあり餡トーストをいつも選べる



新世界、向こうのほうにあるらしい 指に微風をまとわせながら
 中途でも新入社員ネクタイの濃い紺色も緊張してる
 真っ新たなキャンバスに置く絵筆へといつか誰かの視線が注ぐ
 会員ナンバー四番新田恵利空で云へる吾ぽかんと見ゆる
 間違いの証のようにひび割れた指でなぞった新茶のラベル
 私はよき教師にはなれまいと泣きつつ摘まむバジルの新芽
 8年で娘夫婦の仲の良さ嫡子無けれど輝き新た
 新しい夜明けを待った雨だったそしてわたしは天使になるの
 新しいカーナビと進む自分の道はどこへ向かっても未来
 金色をひいて火の鳥は飛んでいく火の粉を吞んで光に変へて
 真新しいチョークの角が粉になり校舎の脇にユキヤナギ咲く
 新しいレシピと言って納豆に蜂蜜掛ける 大人の飛躍
 新たなる渚を往けば遥かなる青空のもと吹けるさちかぜ
 遠くから新入社員がやってきてバルカン人の挨拶をする
 あざやけき朱のひと刷毛に新しきたくらみ兆すひと日のはじめ
 はやぶさを追ってつばさがゆくホーム 北の空への滑走路めく

- ◆ かうすまあ
- ◆ 酒れ井戸
- ◆ 河岸景都
- ◆ 菊池洋勝
- ◆ 君村類
- ◆ 久助
- ◆ 響音
- ◆ 古都 梨衣子
- ◆ ことのはもも。
- ◆ 咲兵衛
- ◆ 佐藤水魚
- ◆ 三月三日
- ◆ 汐射ハルカ
- ◆ 塩谷風月
- ◆ 紫苑
- ◆ 西鎮

あたらしいあだ名がふえていくときの、少しわたしが薄まる感じ
 新年度だからと変わる世に採まれ励んでしまう私は弱い
 乗るはずの新快速のベルが鳴る手をゆるめても残る指さき
 玉ねぎと新玉ねぎは分けられて青果売り場のひかりのなかに
 ブランコとチーター 真っ白な履歴書の麗しいホモ・サピエンス
 四月一日その儂さをいうように新たに靴をおろすなどして
 排水溝はいつも新たで パレットを拒否した画家はおしり打たれて
 ニューソート自己啓発は避けられぬレナにはきつい農作業かな
 六月の都会の風は新しいメルヘン野郎のシステム手帳
 駅前のコンビニが新しくなり母の電話はまた長くなる
 新しいシャツ新しい靴カバン新しくない私青空
 視覚には新しい角むらさきのハレーションなど表面のつや
 天才の頭の中に迷いこむような新宿駅地下通路
 新しい朝より古い朝が来てほしいひとりっきりの寝室

- ◆ あき子
- ◆ 麻倉ゆえ
- ◆ 雨虎俊寛
- ◆ 有村桔梗
- ◆ 歩歩
- ◆ 五十子尚夏
- ◆ 池田竜男
- ◆ 石川順一
- ◆ 宇祖田都子
- ◆ 泳二
- ◆ 岡田濫
- ◆ 音平まど
- ◆ がね





まず祈る（触れても石に変わらぬように）新しい本をひらけば踊りだす文字
 終末の時計の針は零回り新世界へと僕らは進む
 はなみずきはらりソフアーにとろとろり 新月私はなにごともなく
 わが同期新卒なれどわれよりも肝が据わりて愛想もよし
 ゆっくりと新幹線へ乗り込んで私が私へ還りゆく旅
 新しくなった世界はこわくって日差しの色を窓越しに見る
 行く末を見定め難き三月に今年も薔薇の新芽が灯る
 新生児室のコットのそれぞれに採れたばかりの白桃がある
 水を飲む きりんの首に八つ目の骨の動くを知らされてのち
 新しい顔でふと見る涙目の古い顔 無視してアンキック
 新しいパンプスの黒いエナメルつま先に朝の光がとまる
 まぶしさの底を泳いだ新緑の影は波紋のようにゆらめく
 初めての町へ行くのねタンポポは知らない人と新快速で
 新人がゆっくり焼いた餃子にも店の油の記憶含みぬ
 新鮮さだけが魅力じゃないことを背中で語るドライフラワー
 新曲は新しい星 その日まで生き抜くための道しるべになる

◆ 雀來豆
 ◆ 白石 夜花
 ◆ たえなかず
 ◆ 高橋良
 ◆ 田中翠香
 ◆ 千原こはぎ
 ◆ 月硝子
 ◆ ともえ夕夏
 ◆ 中村成志
 ◆ 西淳子
 ◆ 薄荷。
 ◆ 早月くう
 ◆ 雛河麦
 ◆ 廣珍堂
 ◆ 飛和
 ◆ 福山桃歌



真っ先にノートに記す君のイニシャル照れてすぐ消した書いた
 新人のマネキンすこし肌寒いようすで春の真似をしている
 おろしたて大学ノートの一行目 そこだけ美文字でいつも始まる
 新橋は霧が濃い町今日もまた課長が愚痴を延々と吐く
 あたらしくつがぬれてもよごれてもねこのピートは陽気に歌う
 しんねんどしんねんどって姉ちゃんが言う口癖がうつるおとうと
 感情はつねに上書きされていきその野に生えるカラスノエンドウ
 新作の短歌浮かばず Chim → Pom のオブジェに心曝す気である
 空色の階段をステージに設へて天国から降りてくる新人
 新しい気持ちは波だ はしゃいでる黄色いカバーのランドセル行く
 新しい土はどうだ おいしいか ひとり暮らしはやってけそうか
 卒業をしたのに気になる新学期ざわざわ森からまだ出られない
 スライサーに新玉ねぎをすべらせてたのしき春の山姥となる
 新しき人の流れに耐えきれず眠れる葉をねだるも虚し
 まっさらなダイアリーの一行目 君の名刻む 溜息ともに
 自分だけ損するような関係はもういらぬや新しい靴

◆ 細川エリカ
 ◆ ほのかわり
 ◆ 真岡まな
 ◆ まさけ
 ◆ 御糸さち
 ◆ 衣未
 ◆ 虫武一俊
 ◆ 六浦筆の助
 ◆ 村田一広
 ◆ 杜野詩季
 ◆ 矢野目知桂
 ◆ ゆりこ
 ◆ 龍翔
 ◆ れいあむ
 ◆ Redvelvetake
 ◆ waka_na

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

「知らんけど」言い添えるごとと繰りかえす航空障害灯の明滅

紅坂紫

第二句の「ごと」は、「よように」と「たびに」の二通り意味が取れるが、ここでは前者だろう。「いいんじゃない? (知らんけど)」「大丈夫だよ (知らんけど)」
会話のほんの僅かな隙間を縫うように、遠くの赤い灯の点滅が滑りこんでくる。自分ではそれなりに真面目に話しているのに、相手の返事がどことなく空疎に聞こえるのは、その「言い添え」のせいなのか。これを自問自答と読んでみても、また違った趣が見える。

一首評

中村成志

低く飛ぶ燕の速さ 春という暴力に期待してしまふのか

虫武一俊

そうか、春は暴力なのだ。という痛烈な読後感である。北国に住む私にとって、春は長く辛い冬からの解放なのであったが、この「解放」という言葉がはらむ匂いも、「解放」という語句を使う認識も、ひとつの暴力のような気さえしてくる。初句からシャープな語が連続して配置され、韻律も軽やかだ。それ故に結句の自問が、よく響く。

一首評

西鎮

紫のカバの夢見た日の朝はケチャップ多めのオムライス食む

ゆりこ

連作「陽射しを分けあって」八首。動物園に出かけたことを軽快に歌っていてどの歌も楽しい。動物は笑わなくても手を振らなくても可愛い。存在自体がたのしいのであるからと、作者が言っているかのようには思える心地よい連作だった。引用したのは冒頭の一首。紫と赤と黄、フルカラーディスプレイで見たような夢。いったいこのカバの夢を見たのは動物園に行く前だったのか、後だったのか? 考えているうちにほらもうこんなにも夕焼け。

一首評

雀來豆

梅干しの種飛ばしあい抱きあった消えゆく無垢な惑星の上

鹿ヶ谷街庵

性愛の歌というのは、作者が女性なら冷徹なほど無機的描写に終始し、男性なら滑稽なほど自己愛とギミックに傾くべき、とそう思う(与謝野晶子を除く)。その意では、この連作はぎりぎり成功しているだろう。掲出歌は、「梅干しの種」という短歌的アイテムがなかなか気を利かしている。そこから「惑星」への展開などは、恋愛の些事と宇宙という、どこかつんく、楽曲的スケール感の対比を感じさせ、魅力的な一首となった。

一首評

五十子尚夏

この空を辿っていけば昨日見た動画の中の戦場に着く

諏訪灯

連作「動揺」からの一首。未だ収束が見えない世界の現状への憂いが横たわる。基本的に空は平和を象徴するものなのに、今見ているこの空は、心に深く突き刺さってくる荒れた(または悲しい)画面の場所に繋がっている事実。こうすればこうなる、と淡々と詠んでいることが一層の悲壮感を醸し出して、読み手は揺さぶられる。揺さぶられて同時に、自分と同じような想いがそこにあることに小さく安堵するだろう。

一首評

杜野詩季

淡雪を踏みて駱駝はゆつくりとじつに駱駝はゆつくり沈む

宇祖田都子

テーマ詠「淡」。八十首の中で「淡雪」など雪を詠んだ歌は十首あった。そんな中、掲出歌は他に類を見ない「淡雪」の歌である。まず、上句で淡雪と駱駝という組合せの不自然さに惹かれる。また、「駱駝はゆつくり」と来れば「歩む」などの語を想起させるのだが、下句でそれが裏切られる。第二句と第四句で「駱駝」が出てくるが、これは駱駝の沈下を視覚的にも表しているよう。いつの間にかこの空想的世界観に沈んでしまった。

一首評

高橋良

感想文とは魂に課せられた年貢と思う八月の末

月硝子

魂に課せられた年貢!面白くてかっこいい例え!結句の「八月の末」や連作タイトルから「感想文」は夏休みの課題かなあと想像しました。「年貢」は「年貢の納め時」みたいな意味合いも込められていそう。感想文を書くのは苦手なので、「魂に課せられた年貢」は分かるような気がします。感想を書くということとは、自分の魂の一部を他者に差し出すことなのかもしれないなあと思いました(これが僕の魂の一部です。お納めください)。

一首評

西淳子

青硝子大影たゆたふ白が降るしゃなりしゃなる水生生物と

ナイアガラすすぎ

水族館での歌だろうか、ガラスの青と大きな魚影が目につかぶ。白が降るのは小魚か泡か。その曖昧さも青と対比されて鮮やかなシーンだろう。面白いのは、擬態語の「しゃなり」が活用したように続くことだ。また、「しゃなるなる」のなるは、断定の助動詞とも取れ、「しゃなりしゃなる然とした」という意味に取れる。「しゃなり」が「しゃなるなる」と活用するような泳ぎが想像できて、その言葉のユーモアが面白い歌であった。

一首評

大坪命樹



短歌リレーコラム 望遠鏡 8



書き手

西村曜

テーマ 「ふたり歌会」 歌会記

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

二〇二二年四月十四日(木)に、家の居間に夫である佐藤博之と「ふたり歌会」を開催しました。コロナ禍のなか対面の歌会を久しくやっていないので、歌会の最少人数とおもわれるふたりの対面歌会が夫婦でならのできるのでは、とおもったの試みです。

西村 はい、ではふたり歌会をはじめます。よろしくお願ひします。歌は自由詠、既発表歌可です。

ふと過ぎる「ためらい傷」ということは一番くじを四回引いて

／西村曜「七月の短歌日記より」「うたそら」第4号

はならないんじゃないだろうか……。

佐藤 そうだね……。

西村 じゃあ、わたしはこの歌は、一番くじを四回引くことから想起される言葉が「ためらい傷」なんだよ、という歌なんですよ。

佐藤 だとしたら、やっぱり歌の順番が逆だよ。

西村 「一番くじを四回引いて」「ためらい傷」ということばが過ぎつたと、上句と下句を逆にする？ でもわかるんじゃない？ それは最初の歌のかたちでも。

佐藤 わかるんだけど……。

西村 一番くじを四回引くシチュエーションって、けっきょくいいのが出なかったから、あと一回、あと一回つて引くかんじだとおもうんだけど、それを「ためらい傷」みたいな傷をどんどんつけていくこととリンクさせたかったんだけど。

佐藤 リンクはできる。

西村 それは上句と下句を入れ替えたところで変わらぬかい？

佐藤 いや、僕は元歌の上句が重いというか、前に唐突感があつて、下句はその答え合わせ、つてほどでもないけど、リンクしていることもわかるんだけど、実際に起こったことの順序としては逆じゃないですか。だから種明かしとしてはちよつと種と仕掛けの関係が弱いし、「ためらい傷」がはじめにあると唐突すぎるのもあるから、上句と下句を逆にしたほうがいいとおもう。

佐藤 まずこの歌のポイントとしては「ためらい傷」という言葉と「一番くじ」という言葉。この二つの取り合わせが歌のポイントかとおもいます。「ためらい傷」ということで、ざっくりと思いい切りよくはいかなくて、中途半端についた傷なのですけれど、それが「一番くじ」を四回引く、何度も何度も引いて、でも自分で満足できる結果が得られなかった、と。けっきょくこの「一番くじ」は当たらなかつたんだな、とおもいました。

それが「ためらい傷」のように、自分のなかですつきりしないことが四回続いた点が、この歌のポイントだとおもいます。ちよつと気になることとして、感覚ではその「ためらい傷」が「一番くじ」と取り合わせとしてあるとき、数詞が出てくるとわかるなという気がします。けれど初句の「ふと過ぎる」があまり効いていないとおもわれました。「ことば」でいいのかわ、もうちよつと見えたほうがいい気もしました。歌なのでけっきょくそこはほんとうに傷がついていなかったにしろ、何かは傷ついていて、それを書いたほうが痛さなりリアリティなりが伝わつてくるとおもいました。

西村 これ、リアルについてる傷じゃなくない？

佐藤 リアルには傷ついていないとおもう。

西村 うん。で、「ふと過ぎる」がよくないって言つてるの？

佐藤 そこはよくない。

西村 それはわたしもちよつとおもつてました。「ふと」短歌でよく使つちゃうんだけど、何かの

西村 では佐藤さんの歌に移ります。

紫のインクの蹟が百年の年を經り來てまとい
ゆく呪詛 ／佐藤博之「心の花」二〇二二年三月号

西村 夫婦なのでわかつてしまうのかもしれないですが、これは東京駅前のインターメディアテクに行ったときに見た展示物でしょうか？

佐藤 そうです。

西村 そういうのわかっちゃうのあれだよね……。でも夫婦の歌会だから仕方ない。歌の意味としては「インクの蹟」が年月の経つたときに、呪い、呪詛のようになっていくんだ、という。物が百年経つたら妖怪になる、みたいな。「紫」というのがいいとおもいました。高貴な色でもあるけれど、普段使いの色ではないような色だから真実味がある。でも「インクの蹟」なんですよね、「インクの蹟」ってどういうこと？ インクで書かれた字じゃなくて、染みみたいなこと？

佐藤 まあどちらでも。

西村 どちらでもか。あと「經り來て」「まといゆく」と続いているところがちよつと苦しいとおもいました。「經り來て」を使うなら「まといゆく」の「ゆく」はいらないし、「まといゆく」を使いたいなら「經り來て」の「來て」を何とかする、というのはできるとおもいます。では、自歌自註をどうぞ。

佐藤 はい。百年経つて、しかも文章つてこと

歌会で「ふと」はあんまりよくないって言われた。佐藤 どちらかといつたら言葉を削るとき削れるもののひとつだとおもう。だいたい短歌つていうのは、ふとおもう、ふと何かすることが詠まれるから「ふと」はほほいらない。

西村 それで、さっきの「傷」がリアルにどうこうつていうのがちよつとよくわからなかつた。佐藤 ことばが過ぎるだけだと、なぜ過ぎつたのかという言葉もなく、作者としての接点が浅い。だから「ふと過ぎる」だけじゃなくて「ためらい傷」という言葉がまじまじと浮かんできくるようなシチュエーションがいてとおもう。「ふと過ぎる」だと、あまりにもただ頭のなかで勝手に過ぎた、というかんじがするから、実際に傷つかないまでもちよつと何か「ためらい傷」を手触りをもつて感じられるところがほしい。

西村 「一番くじを四回引いて」たことそのものが「ためらい傷」とは考えられないかんじ？

佐藤 考えられるけど……。「一番くじを四回引いた」という体験だけの歌なのか「ためらい傷」がつくことこの歌なのか。「ためらい傷」が強めの言葉だからもうちよつと「ためらい傷」が重くていい気がする。

西村 歌のなかでの比重が、つてこと？

佐藤 うん。と、おもう。

西村 ……はい、では佐藤さんの批評が終わりしました。この歌会、自歌自註のコーナーを設けないと、ひとりお話会になってしまつて歌会に

で……

西村 文章なの、やっぱり。

佐藤 インク染みだし、絵ではないよね。

西村 わたしもこれは絵ではないとおもつた。インクつて言われたらペンとインクをおもつた。なんか文章だよ、文書だよ。

佐藤 うん。だから文字にせよ文字でないにせよ文章を含めた紙であるところで、それが百年前の学説つてことになる、それに囚われちゃつてる部分もあるのか、と。それが文章に書かれているなかで意図していないもの、活字として残っているんだけど大元は意図していないようなもの、染みなんかも含めるし文字もなんだけど、それが百年も経つてくると人格化しちゃつて、あの先生の書いたものだから……つてなるのはある意味で呪詛なんじゃないかなあ、つて。

西村 うん、そこは読み取れませんでした。付喪神的なことしか取れなかつた。

佐藤 付喪神的な歌としてもいいんだけど、どちらの意味も込めてるし。

西村 ……はい、ということ、ふたり歌会を終了します。ありがとうございます。

佐藤 ありがとうございます。

追記：感想として、佐藤さんは「歌会にはやつぱり三人はほしいね……」と言っていました。わたしも、歌会の最少人数はやつぱり三人だとおもいます。

次号予告 うたそら 第9号

連作欄 8首の連作 自由詠
 テーマ詠欄 「色」
 一首評「そらよみ」
 短歌リレーコラム「望遠鏡」
 リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

第9号 '22 6/30(木) 24時
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「色」1首

第10号 '22 8/31(水) 24時
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「涼」1首



編集後記

夏のように暑かったり、はたまたひやっと寒い日が続いたり、気候の安定しない今日このごろですが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。体調など崩されていませんか。

このたびは、短歌誌「うたそら」第8号へのご寄稿をいただきまして、ありがとうございます。ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第8号の参加歌人さまは79名、連作欄には59名、テーマ詠には62名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「新」。新生活や新しいアイテム、新しい朝など、さまざまな「新」の短歌が集まりました。

一首評「そらよみ」は第7回となりました。歌を投稿するだけでなく、読んで感想を伝える／もらうことで、得られる気づきや喜びもあるのではと思います。また、「短歌は作らないけど読むのが好き」という方の、「そらよみ」コーナーだけのご参加も大歓迎です。ぜひ次回もたくさんのご寄稿をお待ちしております。

短歌なリレーコラム「望遠鏡」は西村曜さん、リレーエッセイ「いちごいちえ」は竹村ヒカルさんが書いてくださいました。ありがとうございます！

今号も皆さまのおかげで読み応えのある「うたそら」をお届けすることができました。どうぞごゆっくりお楽しみください。

「うたそら」では Twitter での呟きもお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号は6月末×切の7月初旬発行、テーマ詠のお題は「色」です。夏が始まり、さまざまなものが色鮮やかに輝き始める時期ですね。色とりどりのすてきな作品をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ



竹村ヒカル



汚されるために生まれた雑巾を丁寧に洗うきみのきれいさ

ぼくは自分のおばあちゃんに会ったことがない。父がまだ大学生のときに病気で亡くなってしまったらしい。ぼくが生まれる前の話だ。学生時代のぼくは優等生でもなく、グレてもない。そんなどこにでもいる少年が、初めてはつきりと親に反抗したのは高校三年生の秋の日だった。その日の朝、平日、登校の時間を過ぎて布団から出なかった。実はそれまでも、家を出たのに学校は行かず、ツタヤの視聴コーナーに長居をしたり、本屋で何時間も立ち読みをして、夕方になると帰るなどして過ごしていた。朝の出席だけとると、具合はそれまでも、家を出たのに学校は行かず、ツタヤの視聴コーナーに長居をしたり、本屋で何時間も立ち読みをして、夕方になると帰るなどして過ごしていた。朝の出席だけとると、具

合の悪いふりをして保健室に行ったりもした。常習的にサボっていたのだ。主婦だった母にはバレないように。でも、その朝だけは、だめだった。理由は忘れてしまった。かたくなに布団にくるまり続けるぼくと、それを引き剥がそうとする母との攻防が続いた。諦めて部屋から出ていく母。勝った、と思った。どれくらいか時間が経って、さつきとは違う、落ち着いた声がぼくを呼んだ。「ヒカル、もう怒らないから居間にきなさい」頃合いを見て居間へ入ると、父と母が並んで正座していた。異様な空気にぼくは平静を装いながら、あれ、お父さん仕事は？と訊くと、休んだよと答えた。ぼくは、クラスでいじめにあっていることを打ち明けた。話すしかなかった。言える範囲のことを、正直に話した。父は眉をひそめていた。母はすこし泣いている気がした。そのあと三人でカラオケへ行った。父も母も歌わなかった。歌いたいただけ歌いなさいと言った。ぼくはブルーハーツなどを歌ったりした。二人は、意外にも穏やかな顔でぼくの下手くそ

な歌を聴いていた。もう帰ろうかという時間に父は、お父さんも一曲だけ歌おうかな、とデンモクをとった。「涙そうそう」夏川りみ。父は立って歌い出した。古いアルバムめぐり ありがとうってつぶやいた いつもいつも胸の中 励ましてくれる人よーまだその歌の途中だった。父は急に歌うのをやめた。パッとぼくの方へ身体を向けると、その表情は一瞬にして険しくなった。「ヒカル、お父さんはな、母さんが死んだ日、こんなつらいことは人生でもう二度とない、と思ってた。あんなにつらいこと、大人になってからも、ずっとなかった。だけどな、今、お父さん、あのときよりも、つらい。ヒカル、元気出してくれないか」母はハンカチで顔をおおっていた。カラオケを出て、ぼくが一番好きなラーメン屋へ寄って帰った。次の日の朝、ぼくは布団から出た。朝ご飯を食べ、学校へ行き、保健室もツタヤも寄らず家へ帰った。

8

リレーエッセイ

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
 今号のテーマと書き手さんは…

テーマ **未熟**

書き手 **竹村ヒカル**

合の悪いふりをして保健室に行ったりもした。常習的にサボっていたのだ。主婦だった母にはバレないように。でも、その朝だけは、だめだった。理由は忘れてしまった。かたくなに布団にくるまり続けるぼくと、それを引き剥がそうとする母との攻防が続いた。諦めて部屋から出ていく母。勝った、と思った。どれくらいか時間が経って、さつきとは違う、落ち着いた声がぼくを呼んだ。「ヒカル、もう怒らないから居間にきなさい」頃合いを見て居間へ入ると、父と母が並んで正座していた。異様な空気にぼくは平静を装いながら、あれ、お父さん仕事は？と訊くと、休んだよと答えた。ぼくは、クラスでいじめにあっていることを打ち明けた。話すしかなかった。言える範囲のことを、正直に話した。父は眉をひそめていた。母はすこし泣いている気がした。そのあと三人でカラオケへ行った。父も母も歌わなかった。歌いたいただけ歌いなさいと言った。ぼくはブルーハーツなどを歌ったりした。二人は、意外にも穏やかな顔でぼくの下手くそな歌を聴いていた。もう帰ろうかという時間に父は、お父さんも一曲だけ歌おうかな、とデンモクをとった。「涙そうそう」夏川りみ。父は立って歌い出した。古いアルバムめぐり ありがとうってつぶやいた いつもいつも胸の中 励ましてくれる人よーまだその歌の途中だった。父は急に歌うのをやめた。パッとぼくの方へ身体を向けると、その表情は一瞬にして険しくなった。「ヒカル、お父さんはな、母さんが死んだ日、こんなつらいことは人生でもう二度とない、と思ってた。あんなにつらいこと、大人になってからも、ずっとなかった。だけどな、今、お父さん、あのときよりも、つらい。ヒカル、元気出してくれないか」母はハンカチで顔をおおっていた。カラオケを出て、ぼくが一番好きなラーメン屋へ寄って帰った。次の日の朝、ぼくは布団から出た。朝ご飯を食べ、学校へ行き、保健室もツタヤも寄らず家へ帰った。

うたそら 第8号

発行：2022.05.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>